

魔法武闘伝Gの劣等生

ガノタなエクセル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は西暦2095年

第三次世界大戦が終結して35年が経つた今『魔法』とよばれる力を行使する者達を育成する学校の一つである『国立魔法大学付属第一高等学校』。通称『第一高校』へと入学する一人の武闘家は『魔法師』が強者とされる世界で最強を目指す。

目 次

武闘家襲来！魔法の世界を拳で打ち払え！	1
見よ！流派東方不敗王者之風	5
激突！魔術師対武闘家	12
大激戦！隠れた最強同士のファイト	19
勝負！剣術部 桐原武明	24
日常 嵐の前の静けさ	34

武闘家襲来！魔法の世界を拳で打ち払え！

「……が第一高校か……」

桜が舞い散る学び舎の門を一人の少年がくぐる。

高身長で筋肉質な身体。だが、着？せするタイプなのだろうか、制服を着ている状態ではあまりそういった印象を感じない。

顔は彫りが深く、それなりに整つてはいるが、吊り上がった切れ長の目と顔に付けられた十字傷。そして、まるでにらみをきかせているかのような無愛想な表情はすれ違う者に威圧感を与える。

彼の名前は

どもんかいと

土門魁斗

魔法師の家庭の生まれではないが魔法の素質が発現しており、この第一高校にもなんとか入学できた。

そのため彼が着用している学生服には八枚花弁のエンブレムが無い。つまり二科生であり、魔法実技の成績も下から数えたほうが早いまである。

今、彼の周りに人はほとんどいない。

まだ入学式まで二時間ほどあり、式の準備をする上級生などはいるが、新入生が来るには早すぎる。

取り敢えずどこかで瞑想でもして待つていようと考えた土門はなにか言い合っている男女に見向きもせず学校を彷徨い始めた。

「あの～……新入生ですよね？もう開場時間だから起きてくれませんか？」

中庭。この第一高校の中で最も自然が豊かな空間といつても過言ではない場所。

そこの中でもひときわ大きな一本樹の下で座禅を組み目をつぶつてている少年に対し声を掛ける少女。

「もとより眠つてなどおらん。だが、開場時間となつたことを教えてくれたのには感謝する。」

「あ、一応自己紹介をしておきますね。私は生徒会長を務めています七草真由美です。『七草』と書いて『やしこ』と読むの。」

「そうか、俺は土門魁斗だ。」

土門のあまりにも淡白な返事に真由美は顔をしかめ、その後笑みを浮かべる。

さつき少し話した司波達也もそうだが彼もなかなか攻略が難しそうだ。

七草真由美はいわゆる小悪魔系である。普段はそれなりに節度を持つて他人に接するが、彼女の本質はからかいがり。

ちよつとからかうだけですぐにうろたえてくれるようなちよろい人間も好きだが、ちよつとやそつとのからかいごとに全く動じない男が顔を真っ赤に染めるのを見るのが特に大好きという性格である。色々お話をしても彼の弱点でも見つけていきたいが、今は時間が無い。

だが、ちよつとしたジャブ程度に少し話を続けるぐらいだつたらいいだろうと考え

「私これでもあなたの先輩なんだから敬語ぐらいは使つてほしいものね……もしかして先輩後輩以上の関係になりたいなんて思つてたりしてるのはかしら？」

「以上の関係というのはよくわからんが……俺は師匠程の方でない限り敬意を持つことはない。」

「あら残念。それじゃあそろそろ入学式始まっちゃうから早く講堂に行つてちようだい魁斗君。」

「?……わかつた。」

彼女が言つた「残念」という言葉の意味、急に自分のことを下の名前で呼んだ意味はわからないが取り敢えず忠告通りに講堂へと向かう土門。

「フフフツ。今年の新入生は興味を引く子が多くていいわね♪」

そうつぶやき土門の後ろ姿を見送つていたが、生徒会長である自分も講堂にいないといけないことを思い出し、走つてあとを追いかけるのであつた。

講堂に入ると開始数分前だからかほとんどの席が埋まつていた。

さすがに一席は空いているだろうがそれを探すのは時間がかかりそうだと考えていたがその悩みは杞憂だつた。

入つてすぐの後ろ側の席が空いておりすぐに見つけることができた。

「隣、座つてもいいか?」

「別にいいわよ。」

「そうか。ならば失礼する。」

座ることができた土門はまた瞑想でも始めようかと思つたところで隣から声を掛けられる。

「私は千葉エリカよ。よろしく!」

「私は柴田美月です。」

「そうか。俺は土門魁斗だ。」

「ふうんそれじゃあ土門って呼ばせてもらうわね。」

「別に構わん。」

淡白な返事を返してすぐに瞑想をする土門。

そんな彼は声をかけてきた千葉エリカとその隣にいた柴田美月の更に隣にいた男について意識を向けていた。

先ほどの七草真由美という女もそうだつたがこの二人からも強者の気を感じる……師匠に言われてこの学校に入学したが正解だな……

……

「ゆくぞ魁斗!」

「はい! 師匠!」

「流派! 東方不敗は!」

「王者の風よ!」

「全新!」

「糸裂!」

「天破侠乱! 見よ! 東方は赤く燃えている!」

ギアナ高地の奥地にて二人の男が拳を打ち合わせている。

このギアナ高地での修行を始めてからそろそろ十年がたとうとしている。

これで朝の鍛錬は終わりだ。朝食として釣った魚を焼いて食べて
いるときだった。

「魁斗よ確かにぬしは魔法を使えたよな?」

「ええ。一応隔世遺伝で魔法の素質が発現しておりますが……どうし
てそのようなことを聞くのですか?」

「うむ。おぬしに魔法科高校に通つてもらおうと思つておるのだ。」

「魔法科高校ですか?俺は今さら魔法師になるつもりはないのです
が。」

確かに最初は魔法の才能があることを知り、魔法師を子供の夢なが
らに目指していた。

しかし、師匠に救われ、師匠の力、流派東方不敗の力、武闘家を目
の当たりにした今は魔法師程度に興味が無い。

「別に魔法師を目指せというわけではない。だがこの世界において魔
法師というのは全ての頂点に立つ程の強者だ。強者との戦いは更な
る成長において必要不可欠だからな。」

確かに一般常識としてはそだらう。

だが、師匠を超える生物がいるとは考えられない。

「しかし、俺としては師匠との修行で十分だと思いますが……」

「魁斗よ、おぬしはわしがこの世界の人間でないことは知つておるだ
ろう?」

「はい、かつて教えてくださつたことですので覚えております。」

「そのため流派東方不敗は魔法師との戦いなど想定されておらん。だ
からこそおぬしには魔法科高校に入り魔法師との戦い方を知つてほ
しいと思つておる。それにわしだけが強者ではない。色々な強者と
の戦いの経験というのは必要になるからな。」

「……わかりました。」

こうして土門の第一高校入学が決まった。

だが東方不敗としては魔法師との戦いの経験をしてほしいとい
う思いもそなが。

なによりも学生生活を送つて欲しいという思いもあつた。

見よ！流派東方不敗王者之風

入学式が終わり、新入生は続々とIDカード兼生徒証を受け取りに窓口へと赴く。

土門は入学式の時に自己紹介をしあつた千葉エリカと柴田美月。そしてその隣にいた司波達也と行動を共にしているがほとんど口を開かず、仏頂面なままなのではたから見ると不機嫌にしか見えない。デフォルトの表情がそれだというのもあるが確かに不機嫌と言えなくもない。

さすがに学校に通うにあたつて友人はいたほうがいいだろうと考
えて一人帰らずにいるが、さつきと帰つて鍛練でもして いたい。

殺意というほどでもないが少し気を張り詰めさせた隣の男に気を向
司波達也けながら会話を聞いていると

「お兄様！お待たせいたしました！」

とどこか聞き覚えのある声が聞こえその方向に目を向ける。

そこには先ほど壇上で答辞を読み上げ、その美貌で多くの人間を魅了していた少女がいた。

壇上では神々しさを感じさせた少女がまるで思い人に会えたかのような晴れやかな表情を浮かべていることに美月もエリカも目を丸くしているが、土門はもはや趣味とまでなつていて瞑想をしていたため彼女の姿を見ておらず何も驚きがない。

だが、達也の隣にいるエリカ達を見て「早速デートですか？」と兄に聞く姿には少し肝が冷えた。

笑顔でありながらあそこまでの殺意を放つとは中々のものだと見当違いないことを考える。

女三人寄れば姦しいという言葉通りに早速打ち解けおしゃべりに講じる深雪とエリカと美月にほんとに帰つてしまおうかと考えたところで

「深雪。生徒会の方々の用は済んだのか？」

と達也が声をかける。

「大丈夫ですよ。今日はご挨拶させて頂いただけですから。詳しい話

はまた日を改めてしまいます。」

この言葉に隣にいた男が驚愕するが真由美は意にも返さない。

これは自分がどれだけ言つても取り合わないだろうと諦めた男はただ達也をにらみつける。

「ではいすれまたゆっくりと…」

そう言つて帰ろうとする真由美だが、その帰り際に

「魁斗君もまた今度ね♪」

と言葉を残す。

周りはざわざわと喧騒に包まれ、今まで達也をにらみつけていた男のヘイトが土門に移り、今まで以上の殺意が向けられる。

やはりさつさと帰つておけばよかつた。と後悔しながら帰つていく真由美の背中を見送る土門なのであつた。

土門が教室に入つた瞬間クラスメイトの注目が集まる。

普通ならばすぐに興味など消え、皆自分達の活動に戻るが、一向に視線が消えない。

なんとなく理由を察してげんなりしながら席に着こうとしたところでエリカから声をかけられた。

「お、生徒会長の彼氏さんおはよー！」

「あの女の恋人ではないと昨日説明しただろ。」

「まあ確かにそう聞いたけどもう結構噂広まってるわよ？それこそこの学校で知らない人なんていないぐらいじゃないかしら？」

やはりか：だからここまで皆の注目が集まっているのだろう。

これも全てあの女の策略なのだとしたらかなり悪どい。

これから的生活に多少の不安を抱きながら自分の席に着き受講登録を行う。

その後カウンセラーである小野遥が教室に入つてくるまで彼への視線はなくなることはなかつた。

土門は現在、人気のない校舎裏で一人、何かと戦つていた。

だが、彼以外にはだれもおらず、はたから見れば変な人にしか見

えない。

しかし、実力のある人間が見れば彼の目の前で相対する人間を幻視することが可能だろう。

土門が放つ無数の拳の連打を目の前の幻影はそれを涼しい顔でいなしていく。

この攻撃が数十秒続き、突き出された拳が万を超えたあたりでその動きを止めた。

「シャドウであってもやはりまだ師匠には勝てる気がしないな。拳打の速さはましになつてはいるがスタミナが問題だな……午後はスタミナトレーニングを中心にしてよう。」

今の時間は昼休み

達也達と食堂で昼食を食べていたが、鍛錬欲と周囲から向けられる視線によつてさつさと切り上げて、人目のつかない場所で東方不敗を想定したシャドウファイトをしていた。

取り敢えずもう一度ファイトを行う前に五分ほど休憩しようと思つたところでもはや因縁の相手といつてもいい女の声が聞こえてきた。

「お疲れ様♪そこの自販機で買ったやつだけどいる?」

「またお前か七草真由美……貴様のせいでだいぶ面倒なことになつているんだぞ。」

「あら。いつの間にここにいたんだつて聞かなくていいの?」

「気配自体は少し前から感じ取つていた。それに俺がここに来た時ぐらいいから視線も感じていた。」

土門のこの言葉に真由美は今までのいたずらな笑みから一転、驚愕の表情に染まつた。

『マルチスコープ』

七草真由美が得意とする魔法の一つであり、離れた場所を様々な視点から同時に知覚するという効果で、鍛錬していた土門のこと最も最初はこの魔法を使つて見ていた。

もちろん魔法なため視線というものは感じにくいものであり、真由美自身もそこには気を付けていた。しかし、いま彼は視線を感じてい

たと言つたのだ。

真由美の土門に対する興味がまた増していく。

「へえ……魁斗君はそうとう敏感なようね。それともそんなにお姉さんのこと想つてくれているのかしら？」

「まあ確かに昨日、今日、ほかの人間よりかはお前のことを思いながら過ご」しているかもな。」

「……へ？」

もちろん土門としては真由美のせいで生じた誤解を解かなければならなくなつたので煩わしいと思つてゐるぐらいなのだがそれがちゃんと伝わつていなかつたんだろう。

数舜惚けていた真由美はその後顔を赤く染める。

「あの、魁斗君が私を想つてくれてるのはうれしいけど私七草家の長女だから一般魔法師とそういうつた関係になれないし。あ、けど学生の間の恋人関係とかだつたらいけなくも……いやいやそれでも……つてあ、そうだ！私生徒会でやらないといけない仕事があるの忘れてたからここで失礼するわね／＼おほほほー。」

そのまま早口でブツブツ言いながら目にもとまらぬ速さで帰つていく真由美を土門は見送りながら昨日もこんなことあつたなど感じたのであつた。

放課後

達也・エリカ・美月と今日知り合つた西城レオンハルトと一緒に帰宅しようとしたところで深雪と合流。

だがその深雪の後ろをついてきていたA組の面々が深雪が二科生と行動を共にすることが許されずに難癖をつけてきた。

土門はすぐに出で鍛錬をしていたため知らなかつたが、昼食の時も似たようなことがあつたらしい。

その為もう我慢の限界だつたのだろうかここで啖呵を切つたのはまさかのあのおとなしい美月だつた。

だが一科生になれたというプライドにまみれてゐる彼らにはそれが許せない。

ほぼ駄々をこねるだけで、口を開けば「イード」ときがなどと蔑むことしか言えない。

そしてそれに皮肉げにA組の意見に返していくエリカとレオ。段々とヒートアップしていく口論だが、一科生の怒りに油を注ぐ出来事が起きた。

「おい土門。どこに行くつもりだ？」

「悪いが俺は帰らせてもらう。この程度の奴らに時間を取られるぐら
いなら早く帰つて鍛錬をしたほうがずっと有意義だ。」

「……おい、お前。今僕たちのことをこの程度と言つたのか？」

「ああ。はつきり言つてお前たちからは強者の気を感じない。俺が求
めるは自身のさらなる成長。その為には貴様らのような弱者共に割
く時間はない。」

自分を強者と信じてきた者達にとつてこの土門の言葉は彼らの怒
りを買うには十分だつた。

そして怒りで我を忘れた人間が取る行動は一つ。

土門曰く弱者の集団の中心的存在であつた森崎駿は自身の懐から
拳銃型のCADを取り出し背中を向けている土門にその銃口を向け
る。

引き金を引き、自身の想子サイオンを送り込み起動式を展開する。

森崎の突然の行動と魔法発動の速さに誰も反応できない。

このまま森崎が発動した魔法が土門を襲うと思われた瞬間、森崎の
手からCADが消えた。

それを見た全ての者達が驚愕し、土門の方を見やると彼の手には何
の変哲もないタオルと先ほどまで森崎が持っていたCADがあつた。
「魔法師というのは、これがないところに戦うこともできんのだろう？
武器というものは自分の半身といつても過言ではないのだからなに
よりも気にかけたほうがいいぞ。」

そう言つてCADを投げ返すがまだ誰も反応出来ず地面に落ちて、
カシャンという音が静かな空間に響く。

そのまままた背を向けて歩く土門を見送ることしかできなかつた。

司波家

四、五人の家族ならば普通に生活できるほどのこの家には達也と深雪の二人しかいない。

母親は死に、父親は再婚相手の所に入り浸っているためほとんど二人だけの空間となっている。

いつも一人で他愛もない会話をしているが今一人の男について話している二人に笑顔はない。

「お兄様。彼はいつたいどうやつて森崎君のC A Dを取り上げたのでしょうか？」

「……正直、あいつが何をやつたかは分かつたんだが、どうやつたのかが全くわからなかつた。」

「それは……どういうことなのでしょうか？」

「方法自体は単純だ。あいつは右手に持っていたタオルをC A Dに巻き付けて奪い取つた。常人には視認することすら困難な早さではあるが説明だけなら簡単なように感じるだろう。」

「だが、タオルの長さを超える距離だつたはずなのに移動することなく届かせたんだ。何の変哲もないタオルを伸ばしてな。」

「何より一番の問題はそれらを行う際に魔法式が見えなかつたことだ。」

達也のこの最後の言葉に深雪は驚きを隠せなかつた。

司波達也は精霊エレメンタル・サイトの眼と呼ばれる特殊な知覚能力を持つている。

現代魔法において世界の全ての情報が記されている次元とされている『イデア』

そのイデアに直接アクセスし、そこからただの情報である魔法式や起動式を読み取り、瞬時に解析する事が可能なのだが

そんな達也ですら見えなかつたということはまるで魔法かのようなどその一連の行動は魔法に頼らずに行われたことだということになる。

それは即ち魔法師以外の人間でも扱える可能性があり、誰でも魔法師と同程度になれるということになり、今までの魔法師の地位がくずれる危険性がある。

土門魁斗

彼の力について色々調べなければならない。

そして深雪の安寧の障害となるのであれば全力をもつて排除する必要があるな。

と達也は土門にたいして警戒を強めるのであつた。

激突！魔法師対武闘家

今日も又、教室に入ると数々の視線を受ける。

昨日の今日で噂が風化することなどないことはわかつていたため何も気にせずに席に着く。

当分、昼食は購買で買ったパンで済ませようかと考えていたところで隣から声を掛けられた。

「土門。今日の昼休みは予定があるか？」

「……別に急ぎの用はないが、どうした？」

「深雪に話があるとのことで生徒会に呼ばれたんだが、それにお前も呼ばれているんだ。」

達也のこの言葉にクラスは騒然とする。

生徒会長からのお誘い

普通の生徒ならば一科生であつたとしても一生ないであろう経験をする二科生の男

それが噂の信ぴょう性を上げていく。

「はあ……わかつた行こう。」

噂がなくなるのは当分先になるだろうなどもはや他人事のように考え出す土門であった。

近未来を感じさせる校舎では異質な木造の重厚な扉を達也がノックし、開ける。

そして深雪が入り礼をする。

その姿は同に入つており格式ばつたパーティーやあっても浮かないほどだつた。

先程の達也の動きと合わせて見れば、まるで令嬢とその護衛のようだ。

「いらっしゃい。取り敢えずお話は食事をしながらにしましよう。遠慮しないで掛けて♪」

生徒会室の一番奥の机に座る真由美が笑顔で目の前にある長机に着席を促す。

奥から深雪、達也、土門の順番に座り、反対側にいる生徒会の役員であるう人達と対面する。

生徒会室に備え付けされている自動配膳機ダイニンガサー・バからメニューを選び、準備を終え食事を始める。

「それじゃあ改めて自己紹介をしますね。私の隣にいるのが会計の市原鈴音 通称リンちゃん」

「私のことをその名で呼ぶのは会長だけです。」

「それで更に隣の小さい子が書記の中条あずさ 通称あーちゃん」「会長！下級生の前なんですからあーちゃんなんて呼ばないでください！」

あずさの反応からして普段、周囲の人間からそう呼ばれているのだろう

「それと副会長のはんぞーくんを含めた四人が今期の生徒会役員です。」

「あと私は風紀委員長の渡辺摩利だ。」

生徒会側の自己紹介が終わり、食事が進む。

みんなが自動配膳機の料理を食べる中、摩利が手製の弁当を取り出し、司波兄妹が自分たちの世界を作り出す。

土門はそれになんの関心を持たず、ただ黙々と箸を進めていると、真由美から声をかけられた。

「けど、魁斗君も精進料理を頼むなんて予想外だつたわ。てつきりお肉ばっかり食べてるものかと思つた。」

「お前には関係ないだろ。」

「もう私と魁斗君の仲じやない。それにお前じやなくて真由美つて呼んでよ。」

「たかが数回話した程度の仲だらうが真由美」

「つれないわね……今、真由美つて……」

「お前が真由美と呼べと言つただろ。」

「いやまあ……それはそうだけど……／＼／＼

はだから見れば少し甘酸っぱい雰囲気を出す二人

未だにイチャヤイチャしている兄妹と独特の空間を醸し出す二組に、

残つた者たちは居心地の悪さを感じながら空氣に徹した。

「それじゃあそろそろ本題に入りますね。」

ある程度食事を終えたところで少し顔を赤くした真由美が話を変えた。

内容としては入試の主席合格者である司波深雪の生徒会入りのお願いだつた。

それに対しても深雪は達也の方がふさわしいと推薦するが生徒会は一科生しかなれないという規則があり、却下される。

落ち込んだ深雪が役員を受け入れこれで話は終わりかと思われたとき、そろそろ風紀委員の生徒会選任枠を決めなければという話になつたところで更に話は進む。

風紀委員には一科生でなければならぬという規則は存在しない。それに気が付いた真由美が司波達也を推薦する。

それに対して達也自身が反論するがそれもむなしくトントン拍子に話が進んでいき、最終的に深雪がお願いすることによつて折れてしまつた。

そしていろいろ決まつたところで今まで黙つていた土門が口を開いた。

「それで、結局俺はなぜ呼ばれた？」

今のところ本題の内容としては深雪の生徒会への勧誘しかない。実の兄である達也はともかく自分がいる必要は全くないだろう。この土門の疑問に答えたのは摩利だつた。

「ああ、実は君に聞きたいことがあつてだな。」

どうやら昨日のA組との衝突の時の話を聞きたいようだ。たしかに土門はほとんど中心人物といつても過言ではない、それなのにすぐに帰つてしまい事情聴取は受けていない。

納得しつつ事件のあらましを話そうとすると

「昨日の内容はある程度達也君から聞いている。それではなくその時の行動、森崎駿のCADを取り上げた方法を聞きたい。」

「俺も気になつていたんだ。魔法師に魔法の詮索をするのはマナー違

反だというのはわかっているんだがどうしても気になってしまつてな。」

これに土門は少し逡巡した。

流派東方不敗をそんな簡単に他人に広めてしまつて構わないものなのだろうか。

師匠ならばいつたいどう言うだろうか。

そう考え

「教えるのは構わんが、俺は口が達者な人間ではない。だから手合わせ願えないか?」

放課後

司馬兄妹と土門はまた生徒会室にやつてきた。
彼らを迎えるは昼の時のメンバーともう一人窓の外をじつと眺める男。

その男は振り合えり前にいた達也を素通りし、深雪に話しかける。「ようこそ司波深雪さん。副会長の服部刑部(きょうぶ)です。」

真面目ながらも人当たりの良さを感じる表情で深雪を迎える服部。だがそれも後ろにいる土門の姿を見つけて崩れた。

「土門魁斗。貴様は何をしにここに来た……?」

「もうはんぞーくんそんな顔しないでよ。あーちゃんが怖がってるわよ?」

「土門は私が呼んだ。これからこいつの力を知るための模擬戦を行おうと思つてな。」

真由美の忠告に従い少し落ち着かせる服部。

だが、それでも彼の敵意は消えていない。

「渡辺委員長が出るまでもありません。その模擬戦の相手を私に任せてもらえないでしようか?」

「私は別に構わないが……土門はいいのか?」

「構わない。お前ほどではないが服部もそれなりの強者とみた。ならば俺からは何も言うことはない。」

「そのようなことを言つていられるのも今のうちだ。実力の差を見せ

てやる！」

こうして土門と服部の対決の火蓋が切つて落とされた。

ここまで話に入ることができず、無視され続けてきた達也の表情に
変わりはないが、その背中には哀愁が漂っていた。

模擬戦の場所である第三演習室で向かい合う二人の男。

魔^魔法^法師^師は右手につけたC A Dの調整を続けており

武^武闘^闘家^家は構えをとつて集中を高めている

「なあ土門。 C A Dを持つていなきそうだが準備をしなくていいのか
？」

「問題ない。」

そう淡白に答える土門。

摩利はその返事に不安を感じながらもそうかと返す。

それを見て自分をなめているのかとさらに怒りをたぎらせる服部。
なぜ会長はあのような無愛想で態度の悪い男に好意を向けている
のか。

服部は昨日からそのことについて考えていた。

そして出た結論が『女性。特に会長のようなお嬢様は悪い男に心惹
かれやすくなる』であつた。

その結論に至つた服部は会長をたぶらかした男に対する怒りと会
長を助け出してみせるという使命感に駆られている。

相手は二科生^{ウイード}だが、本気でやつて相手を完膚なきまで叩き潰す。

熱い激情をたぎらせながら目の前の相手を睨み、精神を研ぎ澄ませ
る。

そして摩利の「はじめ！」の合図とともに魔法を展開した。

服部が展開したのは速さ重視の基礎単一系の移動魔法

これで相手を後ろに吹き飛ばして壁に衝突させ意識を奪う

新入生。それもC A Dを持っていない二科生^{ウイード}ときに負けるはず
がない。

一瞬の間をおいて発動される魔法

目の前の男はそれに反応できずに後方の壁に吹き飛ばされる。

自分のシミュレート通りの結果に勝ちを確信した服部。

誰もが土門の敗北を想定した中、その予想はすぐに裏切られた。

土門は空中で一回転し体制を整え、足から壁についた。

そして壁を蹴り十数メートル離れた距離を一瞬で詰め、腕を振り上げる。

服部は咄嗟に後方にステップし、雄叫びをあげながら振り下ろされた手刀は空を切りその風圧だけで服部を更に吹き飛ばす。

土門の一撃の威力に恐怖を覚える一同。

対面する服部は警戒度を一気に上げる。

奴はたかが二科生となめてかかつていい相手ではない

すぐさまC A Dを操作し、魔法を発動する。

発動した魔法は『ドライ・ブリザード』

空気中の二酸化炭素を集め、ドライアイスを作り、高速で打ち出す魔法。

突如現れた氷結が土門を襲うが涼しい顔をしながら飛んでくるドライアイスを拳で破壊する。

だが、それこそが服部の狙い

『ドライ・ブリザード』の副次効果として発生した霧雨を利用し、電撃を浴びせる魔法『這スリい寄ザリンる雷蛇サンダース』を発動する。

放たれた雷撃が土門を襲い爆音を轟かせる。

煙が土門の周囲を覆い、姿を隠す。

全員が土門の身を案じる中、煙の中から声が響いた。

「正直、魔法というものをなめていた。流派東方不敗の技を使わずとも倒すことは容易だと思っていた。」

突如放たれた突風が煙を消す。

そこには無傷で開いたほのかに輝きを放つ右手を突き出す土門の姿があった。

「だが、それは間違いだった。ここからは武闘家として俺がうてる技を用いておまえを倒す！」

カツと目を見開き宣言した土門は流派東方不敗の中でも速さに特

化した技を放つ。

「酔舞・再現江湖デッドリーウェイブ!!」

神速の突進は残像を生み出しながら服部を通り抜け気がつくと土門は服部の背後でポーズを取っていた。

「ばあああくはつ!!」

この掛け声とともに服部を中心として巻き起こる爆発。

服部の身体が空を舞い、地面にたたきつけられる前に土門に抱えられた。

呼吸は安定しているが彼の腕はだらんと垂れ下がっており、気絶しているのがわかる。

「勝者！土門魁斗！」

審判である摩利の声が演習室に響き、魔法師と武闘家の初めての闘いは幕を閉じた。

大激戦！隠れた最強同士のファイト

演習室は静寂に包まれていた。

生徒会の中でも実力者の立ち位置であり、模擬戦においてこれまで無敗の実績を持つ服部の敗北もそうだが

なにより土門の力が彼らから言葉を失わせるに足りた。

男性一人を手刀の風圧だけで吹き飛ばすほどの筋力

魔法の直撃をくらつても無傷でます頑丈さ

そして一瞬のうちに相手を氣絶させるほどの力を持つ彼曰く『流派東方不敗』

もはや人間なのかも疑問に思えるほどの実力に頭が回らない。

「取り敢えず勝負は決した訳だがこれで十分か？」

土門の問いかけでやつと我に返る者達。

「えつと……今のが流派東方不敗？っていう魔法なのよね？」

「流派東方不敗は魔法ではない。天と地の靈気を父母とし、天地自然の大きいなる力をうけて生まれた拳法の流派だ。」

真由美の問い合わせに対する土門の返答に聞いた者達全員が驚愕した。

一世紀以上の歴史を持ち、今やあらゆる武器・兵器よりも強力とされる『魔法』

一部の血族、才能を持つ者にしか使うことができない能力

だが、それを上回るほどの力があることを証明されたものが鍛錬を積めば誰でも扱うことのできる拳法なのだ。

何かの冗談だと疑いたくもあるが、土門は軽々しく冗談を言うような男ではないことは付き合いの短い彼らでもわかる。わかつてしまふからこそその事実を認めたくない。

特に七草真由美は日本でもトップレベルの権力を持つ『十師族』の一つである『七草家』の長女であるため、この力を危険視していた。まずは流派東方不敗について色々と知る必要がありそうだ。そう考えまた質問をしようとしたところで別の人物から土門への質問が飛んでき、開きかけた口をつぐんだ。

「流派東方不敗……あまり聞いたことがない流派だが、所謂一子相伝

の秘伝流派なのか？」

司波達也もまた流派東方不敗に土門魁斗に危険性を感じていた。

誰でも魔法師を超えることができるほどの力

彼自身に魔法師を脅かす気がなかつたとしても魔法師を敵対視する者が流派東方不敗を修めていたのであれば深雪の安寧のために排除する必要がある。

そのための情報を手に入れる必要がある。

そのための達也の質問に対する土門の答えは

「一子相伝？いや、俺と師匠の間に血縁関係はない。まあたしかに今この世界で流派東方不敗を扱えるのは俺と師匠だから似たようなものかもしけんが。」

「お前と師匠だけか。道理であれだけの実力を持ちながら名前を聞いたことがないはずだ。因みにお前の師匠はどのような人物なんだ？」
「師匠か？ そうだな……師匠はとにかく強い。もはや規格外だと言わざるを得ないほどにな。」

お前が言うなとこの場にいた全員が思つたことだろう。

「そして何よりも優しい。地球を、自然を、そして人類を愛する心を持つている。まあ悪人に對しては師匠は苛烈になるがな。」
「そうか。」

これならば少しは信用してみてもいいかもしない。

まだ様子を見ようと質問者である達也と土門の返答を聞いた真由美は考えた。

「うつ！」

「目が覚めたのね！ 大丈夫はんぞーくん！」
「は、はい！ 自分は大丈夫です！」

呻き声をあげながら目を覚ます服部

それに気が付いた真由美が心配そうに顔を近づけるが服部は焦りながら立ち上がり距離をとる。

そして自分を見つめる土門を睨む。

だが、そこに今まで程の殺意はない。

服部の土門への印象は自分が思いを寄せる会長を悪の道に落とす

悪人から恋敵へとなつた。

「取り敢えずお前の実力は認める。これほどの力があるのであれば風紀委員でも活躍できるほど……そうだ！こいつを風紀委員に推薦するのはどうでしようか？会長！渡辺委員長！」

服部のこの言葉にあっけにとられる一同。

「ういえば司波達也を生徒会推薦枠に選んだことをまだ伝えてなかつたことに気が付きばつが悪い表情になる。

雰囲気の変化に気付きはしたがなぜこうなつたのかがわからずにつきよどんとする服部。

「えつと……生徒会は達也くんを推薦することに決めてるのよね……」

「達也？そこにある男ですか？二科生のようですが……勿論土門のような例があるのでしかしたらかもしれません……土門を推薦したほうがいいのではないか？」

「確かに実戦能力があるのかわからぬ司波君よりも副会長との模擬戦で実力が判明した土門君を推薦したほうが建設的かもしれません。」

服部の意見に鈴音が賛成を示す。

あすさや摩利までもがそれに賛成の意を示し、やはり土門を生徒会推薦枠として風紀委員に任命させようかという風潮になっていく。

しかし、それを認めることができない人間が一人

司波深雪である。

彼女はなによりも兄である達也を尊敬・恋慕しており、達也の実力を理解されてないことに憤りを感じていた。

折角達也の実力を正しく理解してもらうチャンスなのにそれをあのような男に不意にされたくはない。

反論をしようとしたところで男の声が響いた。

「ならば達也の実力が分かればいいのだろう？」

「……そうです！ここは演習室ですしお兄様も模擬戦を行えばいかがでしようか！？」

「いや……別にそこまでしなくとも……」

「対戦相手は俺がやろう。達也とは一度ファイトをしたいと思つていた。」

「俺は別に風紀委員に入らなくてもいいんだが……」

「それじゃあ魁斗君は連戦になっちゃうし10分程休憩をとつてからにしましよう。」

「……」

こうして急遽達也対土門の模擬戦が執り行われることとなつた。自分の意見を聞かれることなく勝手に決められたことに無表情ながらも不機嫌になる達也だつた。

少し距離を離して向かい合う達也と土門。

武器を持たずに構える土門に対し達也はアタッシュケースから取り出した自身の拳銃型CADを左手に持ち突っ立つていて。またも審判を務める摩利の「はじめ！」の合図の直後轟音が鳴り響いた。

その音の方に視線を向けるとそこには右の拳を突きつける達也とその拳を左腕で受け止める土門の姿があつた。

「CADを持ちながら初手が打撃とは驚かされたぞ。」

「当然のように受け止められながらそれを言われても嬉しくはないがな。」

笑みを浮かべながら一言会話を交わす二人

そしてまた格闘の応酬が始まる。

左手に持つっていたCADをホルスターに收め、両拳による連打を始める達也。

土門はその全てを受け止め、いなし、躱していく。

土門が返しで放つ拳もまた達也にいなされる。

まさに一進一退の攻防を繰り広げる二人。

格闘戦では埒が明かないと考えたのか達也は一足で土門から距離を取り周りを走り回しながら魔法を使用する。

使用する魔法は『空気弾』^{エア・ブリット}

手元で圧縮空気弾を作り、それを打ち出す魔法であり、比較的簡単

に使用することができる魔法なうえ、達也が持っているC A Dである『シルバー・ホーン』は魔法の連続発動に最適化されており魔法の発動速度が遅い達也でも弾幕を張ることができる。

前後左右、更には上から無数に飛んでくる空気弾に回避をとることで精一杯になる。

だが、土門の表情に焦りはない。

「毎秒六発といつたところか……達也よお前が六発の弾丸を放つのならば！俺は六人の俺でお前の攻撃を止める！」

「秘技！十一王方牌大車併！」

そう叫びながら自身の前面に突き出した掌を円のように動かすと『十・一・王・方・牌・大・車』の文字と火の玉が浮かび上がり掌を突き出すと火の玉は小さな土門となり空気弾を打ち消しながら達也へと殺到する。

魔法ですらできるわけがない有り得ない光景にさすがの達也も無表情を保てず困惑顔で動きを止めてしまう。

その一瞬を土門は見逃さない。

一瞬のうちに距離を詰め手刀を首元で寸止めをする。

二人の間に生まれる静寂

それがこの戦いの終わりを告げた。

勝負！剣術部 桐原武明

その日の授業が終わり放課後。

本日からクラブ活動勧誘期間が始まる。

この期間中は有望な新入生の取り合いになる上にオリエンテーションのためにC A Dの携行が許可されているため別名クラブ活動勧誘合戦と呼ばれており、風紀委員最初の大仕事となる。

新入生の多くがどこのクラブに入ろうかと期待に胸を膨らませる中、不機嫌さを醸し出してる男土門魁斗がいた。

普段から余り人を近づけない雰囲気を出している彼が更に不機嫌なことによりほとんどの人が彼に話しかけることができない。

しかし、それは大多数の人間であつてそんな彼に構わず話すことができる一部の人もいる。

「どうしたんだよ魁斗。腹でも減つてんのか？」

「あんたじやないんだからそんなわけないでしょ。」

「なんだと！」

「エリカちゃんもレオ君も喧嘩はやめてください！」

「まあ、魁斗のことだから鍛錬の時間が減るのが気に食わないんだろう。」

土門と親交があるエリカ・レオンハルト・美月・達也の四人は土門の雰囲気を気にすることなく会話を広げていく。

彼が更に気を悪くしないか周りの人たちは戦々恐々としていたが彼が少し笑みを浮かべているのを見てそれが杞憂だと悟り各自の活動に戻った。

「まあ、そうだな。正直に言つて気が進まん。」

「だが、決つてしまつた以上どうすることもできない。さつさと覚悟を決めておけ……そろそろ俺は行くよ。」

「そうか……達也！」

「どうした？」

「風紀委員頑張れよ。」

「ふつ。お前は早く入るクラブを見つけるよ。」

軽口をたたき、自分の仕事に向かう達也。

それを見送る土門はまだ入るクラブを見つけていない者同士であるエリカと共に勧誘を行う上級生でごつた返す校門前へと向かつた

「勝者！土門魁 「いや違うな。」 なに？」

摩利の勝者の宣言は本人によつて遮られた。

確かに土門は達也の首元に手刀を当てている。

しかし、よく見ると土門の鳩尾には達也の拳が寸止めされていた。

「お互いに急所への寸止め……勝負は引き分けといったところか。」

「けど、だとしたら結局達也君の風紀委員入りはどうするの？」

「確かにそうですね……」

どちらが風紀委員にふさわしいかを決めるための模擬戦だつた。

しかし結果はどちらも申し分ないほどの逸材である。

しかし、推薦枠は一つしかない。

どちらかを選ばなければならぬことに頭を悩ませる。

その悩みに対して当の本人が解決策を出した。

「でしたら自分は「元々は達也が風紀委員にふさわしいかを決めるファイトなんだ。そのまま達也を推薦すればいいだろう。」……」

土門の言葉に明らかに下がつていた演習場の室温が戻つていき、その元凶である少女の笑みからも冷たさがなくなつていく。

だが、深雪以外はなんとなく土門が風紀委員になりたくないだけだということを察していた。

しかし、下手に追及して深雪の機嫌をまた悪くさせても困るので黙つておくことにした。

「なら風紀委員に推薦する人が決まつたところで達也君は本部まで来てくれ。」

「はあ……わかりました。」

「それじゃあ私たちも戻りましょうか。魁斗君は帰つてくれていいわ。今日はありがとう♪」

「構わん。二回もファイトできたのだから俺としては本望だ。」

「それならよかつたわ……そういえば今度クラブ活動勧誘期間が始ま

るけど、うちは生徒会や風紀委員に入つてゐるなどのよほどの事情がない限りはどこかに絶対に入らないといけないからね♪

「なに？」

「いやほんと土門と一緒にいると変な輩に絡まれなくていいから楽だわー！」

入るクラブがまだ決まっていないエリカと土門は現在行動を共にしている。

取りあえず演習を見たいということで『第二体育館』、通称『闘技場』に向かつてゐる。

そのために部活動勧誘を行つてゐる上級生がひしめき合つてゐる道を通つてゐるのだが誰も彼らに声を掛ける様子はない。

二科生だから誰も声を掛ける気が起きていないとかそういうわけではない。

なんなら誰もがエリカを勧誘しようとしている。

深雪という圧倒的美少女が近くにいるせいで埋もれてしまつているが、エリカは彼女とはまた違うタイプの美少女であり、広告塔やマスコットとしては申し分ないほどである。

そのため特に非魔法系クラブが彼女を勧誘しようと目を光らせてゐるが隣にいる土門魁斗が放つ気迫のせいで誰も近づくことができない。

何のアクシデントも起きることなく平和に目的に向かうことができるためエリカの表情はとても明るい笑顔だつた。

「……」

闘技場に着いて現在行われてゐる剣道部の演習を見ているが、エリカは先程の笑みが?のように不機嫌だつた。

「上機嫌かと思えば今は機嫌が悪くなつたり……せわしないやつだなお前は。」

「だつてさ、落ち着いて演習を見るのはいいんだけどその見てるのがこんなただの殺陣じや機嫌も悪くなるでしょ。」

「そうか?これは誰かに見せるためのものがあるので程度見映えをよくし

たほうがいいだろう。それにそれを一般人にはわからないように見せれているんだ。あいつらの技量の高さを伺える。」

「……」

「どうした？」

「いや、あんたのことだから『なんだあれは！武道というものを無礼でいるのか！』とか言うもんだと思つてたから……」

「流石にそのようなこと言わん。俺をなんだと思っているんだ？」

「いやうそれは「ちよつと！何やつてるの！」ん？」

彼らの会話は突如さえぎられた。

下を見ると先ほどまで行われていた演習が終わり、倒れている生徒、何か言い争いをしている女子生徒と男子生徒の構図が出来上がっていた。

野次馬根性を働くかせ近くに向かうエリカ、土門もそれに着いていく。

「あの二人か……面白いことになりそうね。」

「知つているのか？」

「女子の方は壬生沙耶香。一昨年の剣道女子で全国二位よ。男子の方は桐原武明。こつちは関東剣術大会のチャンピオン。まあ、要するにジャンルは違うけど二人とも剣において学生の中でもトップの実力を持つ人達よ。」

「なるほど。」

今現在の険悪な雰囲気。

そして両者共に名のある剣士であればこの後何が起きるか想像に難くない。

武闘家ではあるが剣も少しかじつている土門としても期待を寄せてしまう。

「剣術部の順番までまだ一時間以上あるのよ！どうして大人しくできないの!?」

「おいおい心外だな壬生。あんな未熟者相手じやお前の実力を披露できないうだろから俺が手伝つてやろうつてのによ。」

「無理矢理勝負を吹つかけてきたくせに何が協力よ！その上先輩を気

絶させるなんてどうかしてるわ！」

「あいつが先に手を出してきたんだぜ？それに対しても俺は面の上から竹刀で叩いただけだ。それで気絶するつてことはそいつが未熟なだけだろ。」

明らかに挑発する男子生徒。

一触即発の空気に周りの人達は固唾を飲んで見守ることしかできない。

「せつかくだから哀想だから魔法は使わないでおいてやるよ。」「魔法に頼り切った剣術部のあなたが剣技のみを磨き続ける私に勝てると思つていいの？」

「へつ。なら見せてやるよ。身体能力の限界を超えた次元で競い合う、剣術の剣技をな！」

その言葉と共に始まる試合

一瞬で距離を詰め、両者？き出しの頭部に向けて竹刀を振り下ろす。

スパンという音が響き、それが勝負の決着を伝えた。

ぱつと見では相打ちのように見えるがわずかながら壬生の竹刀の方が深く決まっている。

「真剣なら致命傷よ。素直に負けを認めなさい。」

「真剣なら……？そうかお前は真剣勝負が望みか……ならお望み通り真剣で相手してやるよ！」

負けを認めるよう壬生が言うと、桐原は不適に笑い出し腕に巻いてあつたCADを操作し、竹刀を振り下ろす。

壬生は守るように竹刀を構え後方へ跳んだが、触れた竹刀は真っ二つに切られ、かすつた胸には細い線が入り込んでいた。

振動系・近接戦闘用魔法《高周波ブレード》

刀身を高速振動させ、接触物の分子結合力を超えた振動を伝播させることで固体を局所的に液状化して切断する魔法であり、同じ魔法を使うか、硬化魔法を発動させなければ真正面から打ち合うことはできない。

そして休む暇なく振り下ろされる刃

それは壬生の身体を切り裂くことはなかつた。

真剣が打ち合つたような音を立ててぶつかり合う竹刀。

それを扱うのは一人は勿論桐原。

そしてもう一人は花冠がない制服を着用している少年。

その光景にエリカは目を見開き隣に目をやるとそこにいたはずの連れはいなかつた。

「戦意喪失した者に刃を振り下ろすなど剣士の風上にも置けんぞ。」

「なんだア？ めエ……」

「土門魁斗。武闘家だ。」

「そういう意味じやねえよ！」

「ならどういう意味なんだ？」

「はあ……てめえは新入生……それも二科生だろ？ そんな餓鬼が何のつもりでこの戦いに割つて入つた？ 女の子が傷つくのが許せないと考へてる騎士気取りじやねえだろうな？」

「戦いへの覚悟を持つてるのであればそいつはファイターだそこに女も子供も関係ない。だが、あの戦いの決着はもうすでについている。それなのに更なる追い討ちをかけるなど剣士以前に人としてどうかしているぞ。それほど人斬りがしたいのであれば俺が相手になるよ。」

「ほう……言つてくれるじゃねえか。なら、やつてやろうじやねえか。とはいへハンデは必要だろうからな。最初の一撃はお前に譲つてやるよ。」

突如切つて落とされた戦いの火蓋。

突然の状況に観客達は何も行動を起こすことができない。

「では行くぞ！」

桐原武明は油断していた。

目の前の男から気迫 자체は感じるが雄叫びをあげながら真正面から振り下ろすその姿は初心者丸出しだ。

上段から振り下ろされる刃にあわせて自分の竹刀を構える。

そしてぶつかり合う刀と刀。

このまま相手の竹刀を弾き飛ばして……弾き……飛ばせない！

まるで樹齢何百年もある大木を押し込んでいるかのように動く様子がない。

それどころかドンドン押し込まれていき、そしてついに吹き飛ばされてしまった。

3mほど引き離され、桐原は悟つた。

この男は手を抜いて勝てるほど簡単な相手ではない。

俺が出せる魔法で相手をしなければ勝てない！

そして左腕に装着したC A Dを操作して一足で離された距離を詰める。

その速度は明らかに人間の限界を超えており、常人では目で追うこともできない。

『自己加速術式』

その名の通り自身を加速させる魔法。

単純ながらも強力な魔法であり、魔法に長けた者であればあるほど効果を發揮する。

桐原の速さはその中でも目を見張るものがあり、彼の実力の高さが伺える。

彼が言つたように身体能力の限界を超えた次元の速度で繰り出される数々の剣戟。

だが、土門はその速さについてこれていた。

残像により複数の剣を同時に振つているようすら見える程の斬撃の全てに自身の竹刀を割り込ませており、対抗している。

続くかと思われた拮抗は皆が予想していない形で崩れた。

どんどん加速していく打ち合いに先についてこれなくなつたのは桐原だつた。

魔法で加速した桐原ですら対応できない速さの剣に押されだしていき。

彼は撤退を選んだ。選ばざるをえなかつた。

魔法で加速された全力を用いて後ろに跳んでいく桐原。

自己加速術式だけでは太刀打ちできない。

対抗するためには今までの実力では勝つことができない。

普段の試合ではほとんど使うことのない技術をぶつつけ本番で試した。

闘技場内に思わず耳を塞ぎたくなるなるほどの不快な音が鳴り響く。

そして竹刀を構え、また目で追うのも困難な素早さで近づく桐原。その速さにその場にいた全員が驚愕した。

彼は《高周波ブレード》と《自己加速術式》のマルチキヤスト^{同 時 使 用}を行つたのだ。

系統の違う魔法を同時に使用するためには緻密な魔法操作が必要であり、高等技術として扱われるほどのものだ。

それこそ魔法競技の大きな大会でもベスト4に入るような者がようやく使用できるほどのレベルであり、彼自身関東大会の決勝ですら扱つていなかつた。

桐原はもともとマルチキヤストの成功率はあまり高くなく、5回に1回成功する程度でしかなかつた。

だが、正直この部の悪い賭けにでなければきっとあの男に勝つことができないと考えた桐原はそれに挑戦し、成功した。

竹刀で受け止めるのも不可能な斬撃を通常の人間では反応不可能な速さで振つていく。

土門は今度は自分の竹刀で受け止めることはせずに後ろに跳んでかわした。

圧倒的な加速で目標を追う桐原と、それをかわし続ける土門。

お互に苦悶の表情を浮かべながら続していく試合の中、効力がきれた魔法をもう一度かけ直す桐原。

そのほんの一瞬の隙を見出した土門は「ハアツ!!」と雄叫びをあげる。

それはただ気合を入れただけだが、攻めようとしていた桐原を吹き飛ばした。

また振り出しに戻る彼らの位置、桐原が相手の次の行動に対処する為に姿勢を戻した後土門を見、目を見開いた。

なんと目を閉じていたのだ。

まさに隙だらけな状態だが、それに相対する桐原の背中に一筋の汗が流れた。

今までとは比にならないほどの鬪気が溢れ、その手に持つ竹刀に集中している。

最後の一振り……それで決着がつく……

それを察した桐原もまた自身も集中を高める。

『高周波ブレード』の振動数を更に上げていき、『自己加速術式』を自身の腕だけに限定させながらもその効力を更に上げていく。そしてお互に目を開き、構えをとる。

二人の構えは奇しくも同じだった。

上段の構え

攻めに特化した構えであり、格上の相手に使えば失礼にあたつてしまふこともある構えもある。

即ち、お互いにこの構えをとつたということはお互いにこの一撃を持つて相手を倒すことを考えており、そしてお互いに相手を認め合っているということになる。

明らかに変わり、張り詰めた空気に観客も固唾を呑んで見守る。

そして数秒後、二人が全く同じタイミングで走り出し竹刀を振り下ろす。

真剣が打ち合つたかのような音を残し、交差して位置を入れ替える二人。

「俺の……負けだ。」

そう静かに放つた桐原の竹刀は半ばから断ち切られていた。

『こちら渡辺摩利だ。各員定期報告をしろ。』

渡された通信機から通信に入る。

それを皮切りに次々と続く『異常無し』という通信。

そして自分の同僚となつた森崎駿の報告が終わつたのを聞き届け、自分も報告を入れる。

「こちら司波達也。現在第二体育館……異常ありません。」

これは貸しにしどくぞ魁斗。

そう心の中で呟きながら達也は闘技場を去つていった。

日常 嵐の前の静けさ

ぶつかり合い音を響かせ合う剣と拳

圧倒的な速さで打ち合う攻撃は衝撃波が発生していると勘違いを起こすほどの圧を放ち介入をほぼ不可能にするほどであった。

周囲の者達は倒れ伏しながらも顔だけは激闘の中心に向け、一拳手一投足を見逃すまいとせめてこの闘いを最後まで見届けようと体に鞭打つ。

C A Dを身につけ竹刀を振るう男と丸腰のままただ拳を突き出す男の闘いは互角の様相を呈していた、いや、互角の様に見えるそれは互いの様を見れば一目瞭然だつた。

桐原の表情は曇り、振る竹刀からは鋭さが失われているが土門は余裕の表情を浮かべながら、更に拳打の速度が上がつていく。

だからこそその決着は必然だつた。

疲労から緊張がほんの少し弛んだ一瞬の隙をつき、桐原の背後に回り込んだ土門は彼の首筋へ手刀を落とした。

普通であればなんて事のない一撃だ、その衝撃だけで人を倒れさせることなど漫画などの創作上のものでしかない。

だが、立つことすら限界なほど満身創痍な桐原にとつてそれだけで倒れるには充分だつた。

ドサという音が響き、その後訪れる静寂。

それがこの闘いの決着を知らせる。

倒れ伏す剣術部員数十名とそれに囮まれる土門魁斗

闘いの壮絶さと、それでもなお息ひとつ切らすことなく立つ彼の異常さを誰もが見てわかるだろう。

「本気でやつて素手の奴に勝てないとマジかよ……」「大丈夫か？」

「…これが大丈夫なように見えるか？」

「特に問題はなさそうだな。」「大丈夫じやねえつってんだろ！」

「それだけ騒げるなら充分だろう。俺が師匠と修行をしてた際はいつも3時間ぐらいは気絶していたからな。」

「毎度思うけどお前の師匠どんだけやばいんだよ…」

今の彼らの会話には初めて対面した時のような険はない。

一度の闘いを経て二人は好敵^友手となっていた。

今や土門魁斗の実力は剣術部の部員全員に認められており、剣術部は彼にとつても気が置けない場所となっている。

だが、彼の居場所はここではない。

「そろそろ時間だから俺は行くぞ。」と一言残し魁斗は自身が所属する部活に向かう。

彼が立ち去った闘技場からは「早く起きろ！ 次は素振り千回だ！」の声とそれに付随して悲鳴が響いていた。

今から数日前

クラブ活動勧誘期間二日目、闘技場での騒動があつた次の日の話である。

放課後の昇降口前土門魁斗はそこに一人で立っていた。

先日彼を誘つたエリカは「今あんたと一緒に居たら変なとばつちり受けそうだから今日から別行動ね。」と言われ、いない。

勧誘期間の真っ只中で盛り上がり上がつていた勧誘の声も彼が姿を見せた瞬間に鳴りを潜め、皆、彼を遠目から見つめるばかり。

好奇 嫌悪 羨望 敵意 様々な感情が込められた視線を向けられ、さすがの彼も居心地の悪さを感じる。

もうクラブに入らずに帰つてしまおうか。あの女にはこの状況を説明すれば特例にしてくれるだろう。と考え、そのまま校門を抜けようと歩を進め始めた時、正面から男が現れた。

「たつた一日で随分人氣者になつたじやねえか。土門魁斗」

「お前は……桐原武明か。」

軽口を叩きながら現れたのは先日相対した桐原武明だつた。

周囲の人間はまさか昨日の屈辱を晴らそうとしているのかと身構える。

だが、土門は構えない。

「俺のこと知つてたんだな。」

「昨日、連れからお前のことは聞いていたからな。それで、俺に何の用だ？」

「單刀直入に言わせてもらう。お前、剣術部に入らないか？いや、入つてほしい。お前がいれば三年間大会を総なめ出来る。それに、お前のような奴がいれば部員全員が成長できる。もちろん無理にとは言わないが……どうだ？」

「なるほど……申し出はありがたいが断らせてもらう。」

「そうか。ちなみに理由を聞かせてくれないか？」

剣術部のエースから直接の勧誘を断る土門

普通ならば少なからず動搖する筈だが、当の桐原はまるでそう言われるのが分かりきつていたかの如くあっさりと返事した。

「刀剣等の武器の扱い方は一通り心得ているが、俺は武闘家だ。基本は無手による格闘を得意としている。そのような半端者が魔法剣技を極めようとするお前達と共にいても和を乱すだけ。」

「だから剣術部には入らないってか？律儀というかなんというか……それじゃあお前への用事その二だ。」

まだ他の用があるのかと土門はその二の内容を促す。

それに対しても桐原は何も言わずに土門に背を向けて歩き始めた。

着いてこいということか。そう察した土門は何も言わずに目の前の桐原の背を追いかけた。

部活棟

第一高校本校舎から少し離れたところにある建物であり、部活連が管理している。

本校舎と比べても遜色無い巨大さを誇るそれには数多くの部室が入っているが、基本殆どのクラブは校舎外の施設やグラウンドを使用する為、あまり人はいない。しかし、そこのワンフロアを使って活動する部活がある。

それがマーシャル・マジックアーツ

U.S.N.Aの海兵隊によつて開発された魔法を併用した近接格闘術
毎年多くの入部希望者が現れる人気クラブでありながら、競争の激
しさに自信を無くした新入部員が辞めていき、最終的には半分以下に
なるほどに厳しいことで有名な部活である。

もちろん遅刻なんてのはもつてのほかで、怒鳴られることはないが
その日の組み手の相手が先輩達になるので絶対に遅刻などできない
のだ。

一部を除いて

ガラツ

クラブの練習が始まつてから三十分ほど経過した頃、近年となつて
は珍しい自動ではない横開きドアが開かれた。
「すまない遅くなつた。」

そう言つて入つてきたのは土門魁斗

彼は現在マーシャル・マジックアーツ部に所属しているのだ（その
代わりに週に一度、剣術部の師範として練習に付き合うようになつて
いる）

数日前、桐原に連れてこられたこのクラブはまさに彼に取つて理想
の環境だつた。

自然こそもののそのかわりにトレーニング器具が充実してお
り、さらに格闘術を扱う魔法師が一堂に会してい。

どこかしらのクラブに所属しないといけない土門からすればこれ
以上の良物件はないだろう。

「ん？ああ土門か！今日は剣術部の日だつたんだろ。とりあえず今か
ら組み手練するからペアを組んでくれ。」

そして何よりここの人達は皆人が良い。

上級生の中に彼が二科生だからと下に見るはおらず、一年にはそう
いった者は多くいたが、日がたつにつれて二科生に勝てない事実にプ
ライドがへし折られそのほとんどが部活をやめていった。

その為、今もなお残つている一年生は一科の人間でありながら彼を
見下すことなく接してくれる。

「お疲れ魁斗。剣術部の用事が終わつた直後で悪いけど、胸を借りさ

せてもらうよ。」

特に、今話しかけてきた少年は、いわば親友の関係と言つても過言では無い。

彼の名前は十三束 鋼とみつか はがね
十三の数字を冠する数字持ちの家系であり、想子を強く引き付けるという体質により想子の放出ができず、身体に密着する範囲でしか魔法式の展開ができない。その揶揄として『Range Zero』という異名で呼ばれている。

だが、それは零距離であれば無類の強さを誇るという意味でもあり、本人もそれを自覚しているから近接格闘術を学んでいる。そのため、1年の中でもトップクラスに格闘の練度が高い。

土門は最初に彼と闘つてからクラブ活動でペアを組む際には必ず鋼と組むようになっていた。

「構わん。遠慮などせずかかつてこい！」

その数十秒後、鋼が倒れ伏すのがマーシャル・マジックアーツ部の日常の風景となっていた。

クラブ活動とて毎日あるわけでは無い。

一昔前までは平日どころか休日すらも返上して練習等が行われていたが、それがブラック労働を助長するのではなく問題視されたことにより近年、週に一度休みの日を設けられるように義務付けられ、今はそれが当たり前となっている。

その場合、土門は基本すぐに帰宅しては修行しているのだが、彼は今学内のカフェでコーヒーを飲んでいた。

「君でもコーヒーとか飲むんだね。私、てっきり水しか飲まないものだと思つてた。」

毎度土門に絡んでくる生徒会長を想起させるようなイタズラな笑みを浮かべながら話しかけるのは向かいの席に座る壬生紗耶香。

彼女は直帰しようとしている土門に声をかけ、部活動勧誘期間の時に助けてくれたことのお礼がしたいとここに連れてきたのだ。
だが、土門としてはそんなことどうでも良い。

普通の男子であれば壬生のような美女と二人でお茶ができることに喜ぶのだろうが、普段飲まないコーヒーを嗜む暇があるのであれば修行がしたいと考えている土門からすれば煩わしい以外の何者でも無い。

「コーヒーは（）馳走になつた。もう用がないのならば俺はもう帰らせてもらうぞ。」

「ちよ、ちよつと待つて！ 実はまだあなたにお願いしたいことがあるの！」

そう言つて帰ろうと席を立つ土門を引き留めることに成功した壬生は一つ咳払いを入れてから本題を切り出した。

「実は、非魔法系クラブで同盟を組んで、部活連とは別の組織を作るつもりなの。魔法科高校だから、ある程度魔法で成績が左右されるのは仕方ないとても、クラブ活動まで魔法優先にされるのは許せない！だから私たちは今年中に組織を発足し、学校側に考えを伝えるつもり。」

「…で、それを俺に手伝えということか？」

「ええ。貴方がマーシャル・マジックアーツ部に所属しているのは知つてゐるわ。けど、二科生だからって不当な扱いを受けたとかつて経験は貴方にもあるでしよう？」

「私はある。あれは入学してすぐ後ぐらいだつたかな、ある一科生の人の技に見惚れた私はその人に手合わせをお願いしたの。」

「その時に言われたの『二科生では相手にならない』って。」

「とても悔しかつた。二科生だからって、魔法の腕は劣つているからつて、私の剣まで否定されたのが許せなかつた。」

そう言つて下を向き、黙り込む壬生。

コップを握る手には力が入り込んでいき、本当に悔しがつてているのがわかる。

その様子を見た土門は席を立ち、一言言い放つた。

「くだらん」

きっと了承する旨のことを言うのだろうと思つていたのだろう。

壬生は驚きと困惑が織り交ぜになつた表情で見上げた。

「魔法技術で劣っていたからと剣の勝負の土俵に立たせてもらえた
かった。それが悔しいからこそ、剣を捨て、同じように燻っている者
共と徒党を組み、言論でなんとかしよう。そんなものはただの逃避で
しかない。」

「誰に断られたのかは知らんが、魔法の力がないから相手にされな
かつたのであればそいつに振り向いてもらえる程に魔法を研鑽すれ
ばいい。もしくは、魔法師すらも圧倒できるほどに剣を極めればい
い。」

「それを諦めたくせに平等を謳うなど愚の骨頂。俺は強者と闘い、自
らの力を高める為にこの学校に来たんだ。貴様のような弱者に構う
時間は無い。」

もうこれ以上話すことなど無いと壬生に背中を向ける土門。
遠ざかっていく背中をただ眺めることしか彼女にはできなかつた。

次の日

学生の情報伝達速度は早いもので、先日の壬生紗耶香との一幕はも
う学校中で噂になつていた。

やれ壬生を言葉責めにしただの、やれ告白してきた壬生を振つただ
の。少し曲解されていき、その結果、真由美が物凄い形相で1—Eの
教室に突撃してき、また新たに噂が立つたりし、放課後となつた今、土
門は机に突つ伏す程に心的疲労を感じていた。

あのエリカでさえ、今の彼に声をかけない程なのだから疲労が相当
なものだとわかるだろう。

そして、クラスの皆が部活に行こうと席を立つたその時

『全校生徒の皆さん！僕達は学内の差別撤廃を目指す有志同盟です
!!』

日常を破壊する放送が学校中に鳴り響いた。